

内に住み、あふれ出る

(エペソ五・一八〜二一他)

雑誌のエッセイというのは基本的には「読み捨て」だ。だが中には人気が出て、文庫本収録されるものもある。泉麻人の『B級ニュース凶鑑』、ナンシー関の『テレビ消灯時間』など枚挙にいとまがない。そんなエッセイ集の中に忘れられないタイトルがある。『かつおぶしの時代なのだ』。インパクト大のこの作者はご存知椎名誠さん。昭和軽薄体で他のエッセイストに多大な影響を与えた随筆家である。

閑話休題。鯉節ではないが、今は我々がペンテコステ派の時代である。我々は「旬」なのだ。かつては「〇が落ちてる（＝ヘンテコステ）」だの「狐付き」だの散々な言われようだったのが、今では世界のキリスト教会の二・八%がペンテコステ派であり、プロテスタントの最大教派となつていくという（米・ピュー研究所調べ）。だがこのような状況にはある意味危険がある。富や人に頼る誘惑が出てくるからだ。今朝は聖霊の満たしを求めて祈る前に、聖書から私たちが信じている聖霊についての基本的な主張を確認したい。

一、信徒の内に住まわれる聖霊

わが国でキリスト教会を分類するときよく使われるのが「主流派」「福音派」「聖霊派」という分類法だが、前二者はともかく「聖霊派」という術語は大きな問題ををはらんでいる。というのはこれを聞けば、「主流派」や「福音派」には「聖霊」がない、あるいは働いていないかのようなイメージ生まれやすいからである。だがこれは大間違いだ。というのもイエスは「人は水と御霊によつて生まれなければ神の国に入ることができません（ヨハネ三・五）」と言ひ、使徒パウロもまた「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません（コリ二・三）」と明言しているからである。だからもし私たちが聖霊を我らの専有物のように考えているなら、それは大間違いも甚だしいし不敬虔ですらある。確かに我々の運動の中には異言や預言、あるいは奇跡やいやしといった著しい聖霊の働きが見られるのは確かだ。しかし、そうしたいわゆる超自然的な聖霊の賜物が顕在化していないからと言つて「あの人たちには聖霊が無い」などと決して言つてはならない。彼らがイエスを主と告白し、イエスの生き方に倣つてイエスの後を歩んでいる以上、聖霊は彼らにも住んでいる。その意味でいえば教会といふのはそもそも聖霊派なのだ。

二、信徒の内から満ち溢れる聖霊

しかしこう言つと「すでに与えられているのにどうしてまた祈るのですか」と言つた問いが出てくる。「聖霊はもう来たし、教会も誕生したのだから今さら『待望』しても仕方ない」となるのだ。一理ある。だが聖霊の働きは救済の最初にだけ働くのではない。むしろそれは信徒の生の全領域に働く神の力の臨在であり、すべての信徒は聖霊のいのちに触れ続け、支配され、満たされて生きることが求められている。そのことはエペソ五・一八以下に書かれている。そこには二つの対照的な支配がある。一つは酒だ。飲酒によつて人間の心は支配される。ちよいと一杯のつもりが、気を付けば前後不覚ということがよく見る光景だ。また酒の支配は人を悪行へと導く。飲むにつれ聖人君子になる人をわたしは寡聞にして知らない。だからこれは信徒が避けるべき「支配」だ。対して聖霊の支配の結果はどうだろう。実に素晴らしい。もし人が真に聖霊を求め、心の王座を聖霊なる神に明け渡すなら、私たちの内に生きる聖霊が生き生きと活動をはじめ、私たちが豊かな礼拝へ、教会内での建徳へそして神への感謝へと導くというのだ。またその働きは夫と妻、親と子、奴隷と主人など様々な人間関係の中に働き、そこに倫理的な調和をもたらす。そこには方

リスマ的な御霊の賜物と御霊の美の両者があり、私たちをより深い真理と愛の中へ導いてくださるのだ。

* * *

ある振興宗教の熱心な信者だった彼女だが熱心の結果は家庭不和、特に夫との関係は決定的だった。そんな時彼女の住む町にある牧師が来て伝道が始まった。当初はうさん臭く思っていた彼女だったが、真の信仰に触れて悔い改め、イエスを主と信じるようになった。しかし宗教に傷ついていた夫は洗礼に猛反対。だが彼女は望みを捨てず毎朝一人で祈っていた。ある朝のこと、祈っていると口に口から今まで聞いたこともない言葉が出てきた。彼女はそれを止めず、唇が動くままにした。そしてその「祈り」が止んだとき、今まで体験したことのない満足感が彼女を包んだ。言葉では表しつくせない思いをすべて主の前に出し尽くした感じがしたというのだ。この「異言の祈り」をするようになってから内側が作り変えられたと彼女は言う。比較や自己卑下、更に人を裁く思いから解放されたのだ。それから約二〇年。大笹月江師は恩師の衣鉢を継いで、今も北海道大樹町で郷里伝道を続けていく。聖霊の満たしはあなたを変える恵みの命令だ。今素直に求めよう！